

#001 RE:BOOT

月は、静かに青白く輝いていた。

アフリカ大陸の北タンザニア。セレンゲティ平原を南北に切り裂く谷は、オルドヴァイ峡谷と呼ばれている。オルドヴァイとは、現地近くに原生する植物、オルドパイを由来とする名前らしい。昔、ヨーロッパから来た学者がこの地の名を現地人に尋ねたところ、現地人が勘違いして答えたのをさらに学者は聞き間違えてしまい、オルドヴァイという名となつて語り継がれたとの事だ。

それほどに、人の認識など曖昧あいまいなものだ。

一月の乾いた空気のなか、ピュンマは澄んだ星空を見上げて、小さくため息を吐いた。

俺たちがかつて信じていたものも、曖昧だったのかもしれない……。

ピュンマの目の前には幅五メートル、深さ三メートルほどの穴が掘られており、その底部には、発掘途中のままの“化石”がむき出しになっている。

オルドヴァイ峡谷の切り立った岩山に囲まれた、粗い土肌の崖。その一角に設けられた化石発掘現場

には、煌々^{こうこう}とライトが焚かれている。

この崖からは一九三〇年代以後、石器や初期人類の一つとされるホモ・ハビリスの化石が数多く発掘されていた。彼等と人類との間をつなぐミッシング・リンクは、いまだ発見されてはいない。今回発見されたこの化石は人類史に残る、今世紀最大の発見になることは間違いないのだ。

しかし……。

ピュンマは、じつと化石を見つめたまま、

「そいつはどんな様子だったんだ？」

と、隣に立っている発掘員に尋ねた。

「姿を消すまで、しきりにつぶやいていました。『彼の声』を聞いた、と」

「『彼の声』……?」

「ええ。寢床からこれが」

ピュンマは小さな紙切れを受け取って、一瞥した。書かれていた文句は、前に見たものと寸分違わなかった。

「発掘は一旦中止だ。すぐに全員帰国の準備をしろ」

そう言つてピュンマは今一度、目の前の化石を見下ろした。そこには背中から翼を生やした、まるで『天使』とおぼしきヒト型の化石が横たわっていた。

化石は数カ月前、発見されたものだった。その発掘が進み、全容が露わになるにつれ、発掘員の中か

ら“彼の声”を聞いたという者が現れはじめたのだ。しかも、彼らは一様に同じ文言をつぶやき、その後、全員が姿を消した。

時を同じくして、ピュンマのもとに、もう二十年近く音沙汰のなかった名前からEメールが届いた。懐かしくもあり、一方で気持ちを引き締めねばならない相手だった。

メールには、『T o o o 8』とだけ書かれていた。

「……………」

あのころに、戻る時が来たのか。

サイボーグ008、ピュンマはもう一度、小さな紙切れに目を落とした。

何も関係がないとは思えないな……。

ピュンマの勘が悪いほうへ働いていた。

手元の紙には殴り書きのような文字で、こう書かれていた。

はじめに声ありき。

言葉は“彼”なりき。

人は皆“彼”の言葉につき従い、これを拝せん。

されど地に住む者ども、虚栄と傲慢^{ごうまん}、奸智^{かんち}と壟断^{ろうだん}により、あまたの塔の頂^{いたadaki}を、天へと達^{てつ}することを試^{こころ}み、地上の富を積む。

人心^{じんしん}地上^{おもと}に散りて荒涼^{あれすさ}び、人^彼の^声に耳を貸すことなし。

“彼”人に悔い改むる機^{おり}を与う。

焰と煙と獅子の吼ゆる大きな声とが地に降りくだり、もろもろの塔、踏躰^{ふみにじ}らん。

災い過ぎ去れど、おのが業を看過^{かんか}し、なお耳ある者なくば、“彼”と共に歩む忠実なる聖^{せい}にて真^{まこと}の証人よ。

地と地に住む者をして報いを与え、新しき天地へと導け。

願わくは人々を罪より解き放ち、栄光と尊^{とうと}きと裔^{すえ}限りなくあらんことを。



その一カ月後——同じ言葉を、極東の島国で聞いていた男がいた。

東京、六本木。

北半球はまだ寒く、街には冬のイルミネーションが残っている。ぼんやりした仮初めの日常の空気が、未だこの街を覆っていた。

六本木ヒルズの高層マンションの一室に、島村ジョーは座っていた。先ほどから、ジョーの眼差しは、目の前の大型テレビに向けられている。テレビでは、昨日起きた上海ビル爆破テロのニュースがひっきりなしに流れていた。

「現地時間午後三時三十分ごろ、中国上海市浦東新区の上海金融センタービルが爆破されました。この爆破によりビルは完全に破壊され、近隣のビルを巻き込んで、少なくとも六棟の超高層ビルや周辺の建物多数が被害を受けた模様です。現場周辺は火災と粉塵により混乱しており、現地警察と人民解放軍が懸命の救助活動をおこなっています——」

キャスターの声とともに、画面には上海のビルがドミノのように倒れていく姿が繰り返し流れている。「先、こされちゃったな……」

ジョーは小さくつぶやいた。

リモコンでテレビを消すと、学生服の詰め襟のホックをはずしながら立ち上がり、ゆっくりと窓に近づく。

小雨が細かく窓にうちつけていた。雨だれが流れ落ちるガラスの向こうに、六本木ヒルズのシンボル、森タワーがそびえ立っている。その毅然たる姿を、ジョーはじつと見つめた。

僕にはこれから、為すべきことがある……。

今年高校を卒業する予定のジョーが大学を受験しなかったのは、父親が海外へ赴任することになったからだった。

日本に残る道もあつたが、ジョーはその選択を進んで受け入れた。大学へ進学しなくなつたわけではない。ただ、どこか頭の片隅に、大学進学ではない何かをしなければならないという、使命のようなものがあると感じていたからだつた。その枷かぎとも言える思いは、「宿命」と呼んでもよかった。ジョー

は、決して成績が悪かったわけでも、身体能力が他人より劣っていたわけでもない。むしろどちらかというと、本気を出せば、クラスの誰よりも勉強も運動も優れているという確信があった。しかし、本気を出すという行為自体に、カギをかけられているような思いが、ジョーの心に宿っていた。

その宿命が、あの「声」によつて解き放たれた。

ならば僕は……。

ジョーは心に固い決意を秘めて、窓から視線を移した。

部屋の中は、ごく一般的な高校生の部屋だった。ベッドに机、学校指定のカバンの横には、充電された携帯電話、ほとんど弾いていないギターや、スポーツ雑誌、脱ぎ散らかされたシャツが床に散らばっている。

世界を変えようとしている高校生の部屋には見えないな……。

ジョーは苦笑したあと、小さく息をついて、部屋を出た。

広い吹き抜けのリビングに通じる、螺旋状の階段を下りて、ジョーは台所にいる母親に声をかけた。

「母さん、今日は夕ごはん、いらないから」

おそろくまだ炊飯器のスイッチは入っていないだろう。さほどとがめられることもないと思っていたが、返ってきた母親の言葉は、意外なものだった。

「あら、このあいだ電話してきた子とデートかしら？ おこづかいは大丈夫なの？」

電話してきた子……？